

【人権の窓—1】 **ここは、どんな島？** ～ハンセン病療養施設「大島青松園」



【墓標の松】（左）

源平の合戦に敗れた落ち武者を埋葬し、その上に松を植えたと言われている。

この下からは人骨や刀剣、甲冑が出土した。

【「風の舞」広場】（右）

亡くなった人を火葬し納骨した後の残りの骨を納めている。

1992年に約千人のボランティアの協力で造られた。「死後の魂は風に乗って島を離れ、自由に解き放たれますように」という願いが込められている。



ハンセン病の療養施設「大島青松園」のある大島

大島は、面積約61㍍の小島。島の西海岸からは童話桃太郎の「鬼ヶ島」(女木島)、南には源平の古戦場の屋島「壇ノ浦」、東には二十四の瞳の小豆島が望まれる。

この島、大島にある「国立療養所大島青松園」はハンセン病の療養施設である。

<入所者の一日の生活>

早朝5時から一日の生活が始まる。元気な人は朝のうちに畑に行く。

8時の朝食を終えると、治療が必要な人は治療棟に出かけ、目薬をさしてもらったり、傷の手当をしてもらったり、鼻や口を洗ってもらったり、リハビリ室で運動をしたりする。11時頃に部屋に戻る。不自由な人は午前中に職員の介助で入浴し、元気な人は午後共同浴場へ行く。

12時の昼食を終えると、リハビリや楽しみのために、盲人会や百寿会、クラブ活動(ゲートボールや陶芸等)に参加したり、職員の誘導で散歩に出かけたり、畑仕事をしたり、テレビを見たりして過ごす。午後4時に早めの夕食をとり、テレビを見たり、ラジオを聞いたりして過ごし、8時には床に入る。

ためらう入所者、お構いなくじゃれつく子どもたち

～大島にある庵治(あじ)第二小学校と青松園との交流～

一年間を通して続けられる交流事業の中で、もっともにぎやかなのが運動会。入所者も、出し物に加わる。Aさんは自由のきかない両手に一杯の玉を受け取り、共に玉入れ。「よう投げれんなあ」と言って苦笑い。しかし、子どもとの触れ合いをためらう入所者も多い。

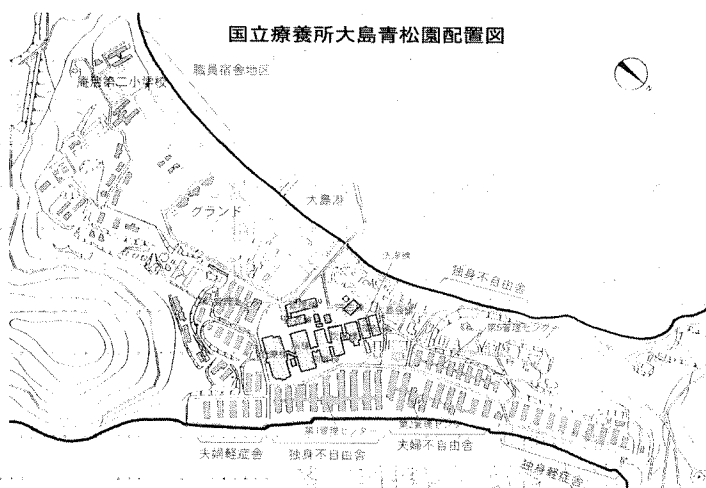
Bさんは、交流が始まって以来、一度も子どもたちの手を握ったことがない。最初は子どもが入れてくれた湯飲みのお茶にも手を付けなかった。「学校で子どもたちと会える。それだけで幸せなんです。」

それでも、子どもたちはお構いなし。入所者にしきりにじゃれつき、仲良しの入所者の姿が見えないと「今日は来ていないの?」と探し回る。6年生のCくんは言う。「差別されてきたことも知ってる。外の人たちが、どんなにひどいことをしてきたのかも。でも、僕たちにとっては、生まれたときから近くに住んでいる普通のおじいちゃんとおばあちゃんだよ。」

「園がなくなったら世間は私たちのことを忘れてしまうんじゃないかな。でもね、この子どもたちだけは、ずっと覚えていてくれるような気がするんですよ。」Dさんは子どもたちを眺めながらこう言った。



大島青松園入り口



協力：大島青松園・庵治第二小学校